

# 若者へのメッセージ 16

## 第一回 失敗を恐れない

武蔵野美術大学教授

関野 吉晴

成功の陰には必ず失敗の積み重ねがある。逆に言うと、何回失敗してもくじけず、何回でもチャレンジし続けなければ必ず成功するはずだ。要はあきらめずにチャレンジし続ける意志があるかどうかが問題なのだ。



### ●プロフィール

関野吉晴（せきの・よしはる）

#### 〈略歴〉

1949年 東京都墨田区に生まれる。

75年 一橋大学法学部卒業。

82年 横浜市立大学医学部卒業。

1971年にアマゾン全域踏査隊長としてアマゾン探検。それ以来20年間アマゾン、アンデス、ギアナ高地、バタゴニア等の南米探検を続ける。

1993年より足かけ10年かけて、アフリカで生まれた人類が世界中に広がる中で、最も遠くまで行ったシベリア、アラスカ經由南米最南端までの旅路（グレートジャーニー）を逆ルートで自分の腕力と脚力だけで辿る旅をする。

2004年からは、アフリカで生まれた人類が日本列島に至った旅路を辿る旅、新グレートジャーニーを始め、2011年に終える。

#### 〈主な著書〉

『グレートジャーニー全記録Ⅰ 移動編』

我々は何処から来たのか』（毎日新聞社）

『グレートジャーニー全記録Ⅱ 寄道編』

我々は何処に行くのか』（毎日新聞社）

『南米大陸』（朝日新聞社）

『ギアナ高地』（講談社） ほかも多数

## ■失敗しない人？

かつて南米からアラスカ、シベリア経由でアフリカまで、グレートジャーニーと呼ばれる旅路にチャレンジした。自分の腕力と脚力だけでという制約を設け、かつ寄り道が多かったため、足かけ10年を費やした。

40いくつかのミニ・エクスペディションの繋がりで。「パタゴニア南部氷床を縦断する」で横断」「パタゴニア南部氷床を縦断する」「ベーリング海峡をカヤックで横断する」「シベリアを犬ぞりで進む」などだ。全部を成功させないとゴールのタンザニアのラエトリ遺跡にたどり着けない。

そうするとある人は勘違いして「関野吉晴は失敗したことがないんだ」と思う。

## ■ベーリング海峡を渡る、徒歩横断

ところが実際は失敗の積み重ねだ。たとえばベーリング海峡横断を見てみよう。最初は徒歩横断を計画した。ベーリング海峡は最短距離85kmだ。水深は最も深いところで50mしかない。2万年前の最終氷期の時



足かけ10年、関野氏が歩んだグレートジャーニーの足跡

は温暖化の現在と違って、今より海の海面が100mも低かった。ということはシベリアとアラスカは陸続きだったということだ。それどころか日本がいくつかさっぱり入るベーリングシア大陸棚を形成していたのだ。1万5千年前頃、まだ陸続きだった大陸棚を、アジア系の狩猟民がマンモスやトナカイを追いかけていくうちにアラスカに到達

した。コロンブスがアメリカに到達する遙か1万年以上前に、彼らはアメリカの発見どころか最初のアメリカ人になったのだ。

1か月間、氷の様子を仲間が観察してくられた。潮流が速いのでベーリング海峡は完全には凍らない。しかし、北極海で凍った氷塊が流れてきた、浅くて狭い海峡で詰まるのだ。そうすれば歩けると思った。ところがセスナを飛ばして、ベーリング海峡を見ると7割ほどしか結氷していない。これでは徒歩横断などはなから無理だ。アラスカ沿岸の氷もかなり速く動いていた。徒歩横断を諦め、セントローレンス島に向かった。

## ■エスキモーと一緒に挑戦

ベーリング海のロシア側にあるこの島はエスキモーが住んでいる。彼らが捕鯨に使っているスキンボートでエスキモーと一緒にベーリング海峡を横断しようと思ったのだ。骨組みは流木で組み、セイウチの皮を張ったボートだ。帆を張って風の力とオールで漕いで進む。25隻のスキンボートがあり、25人のキャプテンがいるので、「一緒にベー

リング海峡を渡らないか」と持ちかけた。皆まったく相手にされなかった。その中で

ウェイドさんがただ一人興味を持ってくれた。ホッキョククジラが獲れた後、ミーティ

ングを行い、6月に渡ることになった。しかし、帆走にいい風が吹く時は西風が多い。

たまに北東の風が吹くが風速15km以上になり、危険すぎる。3回チャレンジしたが逆

風で、漕いでもほとんど進まず断念した。さすがのウェイドさんも音を上げて「この

風ではシベリア側には渡れない。あきらめよう」と提案してきた。

## ■シーカヤックで渡る

最後のチャンスはシーカヤックを使ってペーリング海峡を渡る方法だ。カヤックで

渡った例は数少ない。日本人としては、相棒の渡部純一郎が国際隊に参加して渡った例

だけだ。悪天候の困難な航行だったという。アラスカ最西端、ユーラシア大陸の最西

端でもあるウェールズという小さな村に向かった。アラスカ犬ぞりの旅のゴールだった

ので、滞在したことがあるエスキモーの

村だ。その民家をお借りして海のコンディションがよくなるのを待った。

浜辺の近くの北極海とペーリング海とを潮流が行き来している。私たちが来た時も

風が強く、荒れていた。風が強いので、村のエスキモーも外に出ない。

渡部は、7月中に出航できなければあきらめて来年に順延した方がいいと断言する。チャンスは少ないのだ。

少し風雨が収まり、白波がなくなるとすぐに出航した。しかしすぐに荒れ出し、引き上げた。何回か挑戦して10日目、既に8

月になっていたが、なんと無風快晴になった。早朝から気が高ぶっていた。急いで出

発。このチャンスを逃したら、また荒天が続くことは分かっていた。

鏡のような水面の中、海面に私たちの漕ぐ姿がきれいに映っていた。最初の中継地に6時間で着いた。リトルタイオミード島

だ。ここで一泊する予定だったが、このよ

うな好天は続くはずなので、4時間だけ休憩し、軽い食事をとってユーラシア大陸

に向かった。日付変更線を越えてロシア領

に入り、ビッグタイオミード島の南側を通過して西に向かった。夏なので、夜中でも真っ暗にはならないので助かる。薄明りの中、

ユーラシア大陸の最西端が見えてきたが、切り立った岸壁が続いている。着岸地はそこから犬ぞりが走れる場所ではなくてはいけない。寄ってはいけないという軍港に近づいて、慌てて南に引き返した。やっと着岸できた時は出発から24時間経っていた。

## ■成功の裏にあるもの

このように、一つの成功の裏にいくつもの失敗がある。その連続だった。つまり足

かけ10年のエクスペディションでは、100以上の失敗があつて初めてゴールに着けた。

私たちは物理的障害でも、政治的障害でもあるいは肉体的障害があつても、死ななければ何回でもチャレンジできる。失敗し

ても「なぜ失敗したのか」を考えれば、前よりもいい方法が考えられるはずだ。前向き

で進もうとするなら、失敗は人を成長させ、賢くする。あきらめずに何回でもチャレンジ

し続けなければいつかは成功するはずだ。